Japanese Association for Religious Studies

にあたるといわれてきたが、本発表で女性に関係する死者に焦点を当てたことにより、シュラーッダで祀られるのは「ピタラハ」だけでなく、「母方の祖父」を意味する「マーターマハ mātāmaha」の複数形で表される「母方の祖父・曾祖父・高祖父」も対象となることが分かった。よって、三、シュラーッダの祭祀対象と「祖霊」は一致しないということも、訳語「祖霊祭」の再検討を促す理由として提示できるだろう。

古典インド医学書における浄・不浄の概念

森口　眞衣

「けがれ」に関する概念は、その内容や程度の差こそあれ、世界的に多くの文化で見られる。罪と結びつく重要な基準であり、具体的な事物だけでなく行為や身分といった抽象的な対象にも適用されてきた。ある社会が食物と血について「けがれ」の概念を適用することは多く、よく知られているもののひとつに『旧約聖書』レビ記がある。古代インド社会においてもこれと類似する形式で食物関連規定と血に関する記述が存在する。代表的なのは古代から現代に至るまでインドの社会倫理規範の基盤を構成してきたともいえるダルマ文献、そしてこれと相関関係が指摘されている医学文献であるが、確かにレビ記と共通の対象ではあるものの、インド社会の特色をうかがわせる興味深い内容となっている。

ダルマ文献の食物規定では「食べてよいもの」「避けるべきもの」という基準でさまざまな区分を指定し「けがれある食物」を列挙するが、いかなる場合であっても口にしてはいけないという厳密な禁忌ではない。油や水の塗布という浄化行為によりタブーは乗り越えられるため、食物における「けがれ」は比較的容易に除去される性質のものといえよう。またダルマ文献に数多く登場する「絶食規定」とは「避けるべきもの」を食べてしまった場合の取消し行為のひとつである。食の「けがれ」は「避けるべきもの」を口にしてしまった人間を汚染するのではなく付着するもので、その「けがれ」は特定の手段によって除去可能である。従って食物の「けがれ」は内的な汚染を引きおこすのではなく、あくまで対象の表面に付着したものといえ、当時のインド社会において食物により「けがれ」ることは人々にとってそれほど重大な呵責の対象ではなかったことが想定されよう。また血に関する事物についても、その「けがれ」は沐浴や嗽ぎ、マントラ詠唱など、洗い流す浄化行為を経由すればただちに除去されるものとみなされていた。血による「けがれ」は死の「けがれ」と近接した位置づけではあるが、その扱いは比較的軽く、インド社会において血に関するものはそれほど強くタブー視されていなかった可能性が考えられる。

いっぽう代表的な医学書『スシュルタサンヒター』をみると基本的には特定の食品について摂取を禁忌とはしておらず、ダルマ文献では禁じられた食物についても記載がある。医学書で指示される「避けるべきもの」とは衛生上の観念に基づく判断であり、調理法や食材の管理、厨房や口中の清潔性など、現代と同様の衛生観念を用いて説明される。また絶食もダルマ文献のように禁忌物の取消しではなく、医学的対処法のひとつとして示されている。血については月経血そのものを「けがれ」と

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

は位置づけず、問題のある状態が「けがれ」であり、解決すると「けがれのない血」として扱われるため、宗教的概念としての「けがれ」ではなく、病態や症状の一部を示すため便宜的に「けがれ」の語を適用している可能性がある。また月経期間を「けがれ」ではなく「望ましい子供を授かるための準備期間」と位置づけており、そこで提示される禁止行為の説明にはインド独自の「輪廻」を背景とした因果関係の考え方から影響を受けていることがわかる。これらの記述から医学書における血の「けがれ」とは、出血を伴う月経や出産を実際に経験する女性に付随あるいは内属するようなものではなく、「望ましい子供の誕生」を阻害する要因を指していたことが考えられる。

インド医学書は現代医学の視点からも非常に緻密な観察力を想定させる詳細な症状分析の記述が多く見られるが、同時にインド社会独自の世界観に基づく解釈を含んだ記述も混在する複雑な体系で構成されている。インド医学の解明や理解には、その背後にあるインド社会の状況や思想への理解が不可欠といえよう。

翻訳された理想の女性像
――叙事詩『ラーマーヤナ』をめぐって――

榊　和良

聖仙ヴァールミーキに編まれ、三世紀頃に現存するような姿をとったとされるインドの国民的叙事詩『ラーマーヤナ』の特徴のひとつは、神話性が深められるにつれて、主人公のラーマがヒンドゥー教の主神に加えられたことにある。妻のシーターも、女神ラクシュミーや、タントリズムにおけるシャクティ（女性的原理・生成力）と同値されるようになり、ヒンドゥー・ダルマ社会における理想の女性像から神格化されていった。

この作品は、サンスクリット語テキストだけでも様々な伝本をもち、インドにおける近代諸語に翻訳・翻案されただけでなく、近隣諸国や中央ユーラシア、とりわけ東南アジアに伝えられ、中国や日本にも伝播して変容を遂げた稀代の文学作品である。イスラーム系言語でもペルシア語による翻訳や翻案は三十種類以上も確認され、もうひとつの国民的叙事詩『マハーバーラタ』に劣らず人気があったことを示している。

ムガル皇帝ジャハーンギールの時代に、インド生まれのスーフィー詩人マシーフによりマスナヴィーの形で著されたこの作品は、自らの宗教文化的背景に照らしてこの叙事詩をどのようにとらえたのかを垣間見せてくれる。マシーフは、神への祈禱、預言者への讃美、自らの導師や皇帝ジャハーンギールへの称賛などを述べた後、「妬み深い者たちへの非難」と題した節で、この物語を語ることが異端視されないようにと、アブラハムの逸話を引き合いに出して、物語が異端なのではなく、偶像崇拝者たちを説得するための対話であると語る。皇帝アクバルの時代に、『ラーマーヤナ』の散文訳を命じられたバダーオーニーと同様に、異教徒の聖典を翻訳することへの非難への恐れを感じていたのである。

マシーフの翻訳の特徴は、「ヒンドゥースターニーのパレットにイラン的な要素を描いた作品」と評価されるように、民族英雄叙事詩やロマンス叙事詩の主人公として預言者と同等の人

NII-Electronic Library Service